Program Notes

柿沼 唯（作曲家）

グレトリ：歌劇「嫉妬深い恋人」より “私は鎖を断ち切る”
A.E.M.グレトリ（1741-1813））

アンドレ・エルネスト・モデスト・グレトリは、フランス革命期に大人気を博したフランスの作曲家。オペラ・コミック「嫉妬深い恋人」は、1778年にヴェルサイユ宮殿内の歌劇場で初演され大人気を博し、モーツァルトにも影響を与えたといわれる軽妙洒脱な作品。その第2幕で、嫉妬深い恋人アロンズに嫌気がさしたレオノールが歌う名アリア“私は鎖を断ち切る”は、溌剌としたコロラトゥーラの魅力あふれる一曲となっている。

ビゼー：歌劇「カルメン」より “何を恐れることがありましょう”
G.ビゼー（1838-1875）

ミカエラは、カルメンが誘惑する竜騎兵の伍長ドン・ホセの婚約者。この有名なアリアはカルメンのもとに走ったホセを取り戻しに、山中の密輸業者の隠れ家に現れたミカエラが、健気な心を歌う、美しいメロディが印象的な一曲。「私は何も恐れはしないと言ったけれど、心の底では、私は恐怖で死にそうなのよ！でも怖がるのは間違っているわ、私に勇気をお与え下さい、私をお守り下さい、主よ」。

アーン：クロリスに／至福のとき
R.アーン（1875-1947）

レーナルド・アーンはパリ音楽院でマスネに師事し、その甘美で繊細な作風を受け継いで数多くの歌曲を残した。10代の頃は早熟な才能でパリのサロンを驚かせ、13歳のときに書いた＜私の歌に翼があったなら＞は、今日でも彼の代表作として知られている。

＜クロリスに＞はアーン35歳のときの作品で、17世紀の天才詩人テオフィル・ド・ヴィオの詩による熱烈で美しい愛の歌。「クロリスよ、君が僕を本当に愛しているなら、いや、僕にはわかる、君が僕をとても愛していると。王様だって、僕のように幸せではないだろう…」と歌う。前奏はバッハの「G線上のアリア」を想わせ、メロディの装飾などにもバロック風の趣きがある。

＜至福のとき＞はヴェルレーヌの詩に作曲された耽美的な一曲。恍惚感に満ちた夜の情景描写が、透明なピアノの音色に乗せて密やかに歌われる。「白い月が輝き 森の中 枝々から声が聞こえる 葉陰の下で。おお、愛しい人よ！…… ゆったりと柔らかな平穏が 天空から降りてきたかのよう 空は虹色に輝く 今こそ至福の時。」と歌われる。

グノー：歌劇「ファウスト」より “宝石の歌”
C.グノー（1818-1893）

グノーのオペラの中で今日でも上演されるものは決して多くないが、ゲーテの名高い詩劇に基づく歌劇「ファウスト」は広く知られ、フランス・オペラの代表傑作にも数えられている。この“宝石の歌”は、悪魔と契約して青春を取り戻したファウスト博士が恋に落ちる女性マルグリートが歌う、全曲中屈指の名曲。悪魔メフィストフェレスの計らいによる思わぬ宝石箱の贈り物に我を忘れて喜び、その娘心を絢爛たる声にのせて歌う。「ああ、この鏡に映る自分の美しい姿を見て、喜びを覚えるわ！ あなたなの、マルグリート？ いいえ、

Program Notes

それはもうあなたではない、その顔は王の娘の顔。通り過ぎる誰もがひれ伏すわ！」。

グノー：歌劇「ロメオとジュリエット 」より “私は夢に生きたい”
C.グノー（1818-1893）

オペラ「ロメオとジュリエット」は、この名高いワルツ一曲によって広く知られている。第1幕、舞踏会にデビューするジュリエットが恍惚として歌うこの恋の歌は、軽やかで華麗な表情をたたえていて、コロラトゥーラの魅力に満ちている。「ああ、この夢心地に酔ったまま生きていたい！ この日がもっと続きますよう、甘い炎よ、お前を私の心の中に抱き続けるわ、大事な宝物のように。」と歌い出される。

オッフェンバック：歌劇「ホフマン物語」より “森の小鳥はあこがれを歌う”
J.オッフェンバック（1819-1880）

数多くのオペレッタを作曲したフランスの作曲家、オッフェンバックの唯一のオペラ「ホフマン物語」は、E.T.A.ホフマンの怪奇小説3篇を題材とした作品。その第1幕は、機械仕掛けの人形オランピアが登場する一話。科学者スパランザーニは、オランピアを自分の娘としてサロンにデビューさせ、彼女にこのアリアを歌わせる。途中でゼンマイが切れそうになると召使いコシュニーユが一生懸命にネジを巻き、オランピアは美しいコロラトゥーラをあでやかに歌い上げて、詩人ホフマンの恋心をかき立てるのだった。

フォーレ：夢のあとに
G.フォーレ（1845-1924）

近代フランスの作曲家ガブリエル・フォーレは100曲を超える歌曲を残した。チェロやヴァイオリンの編曲でも親しまれているポピュラーな一曲。「君の姿が誘う眠りの中に燃える幸せを夢見た」と歌い出される詩は、トスカーナ地方の愛の歌を、パリ音楽院声楽科の教授だったビュッシーヌが翻案したもの。作曲当時フォーレは、婚約解消による失意のどん底にあり、その彼を心から慰めたのがビュッシーヌだったという。フォーレの音楽の本質である純粋な内面性がたたえられている。

シャルパンティエ：歌劇「ルイーズ」より “その日から”
ギュスターヴ・シャルパンティエ（1860-1956）

フランスの作曲家シャルパンティエはパン職人の家庭に生まれた。22歳でパリ音楽院に学び、作曲をマスネに師事している。オペラ「ルイーズ」は1900年にパリのオペラ・コミック座で初演され、大成功をおさめた。パリの労働階級の日常を生き生きと描いたこの新作オペラは各地で演奏され、映画化にもなり、たちまちシャルパンティエの名を広めた。現在はあまり上演の機会はないが、フランス・オペラの代表作として、このアリアはよく歌われる。洋裁店で働くお針子ルイーズの恋する幸せのため息、心臓の鼓動、感情の盛り上がりが旋律に反映されており、幸せに満ちた感情を美しく表現するのに高い技巧を必要とする。「恋に落ちたその日から、夢をみているようで、私の心は、あなたとの最初のキスに酔っているわ。夢が夢でなくなるなんて！ 恋は私の上に翼を広げてくれている～なんて人生は美しいの！ ああ、私、幸せだわ 幸せすぎて体が震えるわ」

フォーレ：リディア
G.フォーレ（1845-1924）

この曲は、ルコント・ド・リールの詩による初期の作品（1870年作曲）。「リディアよ、おまえの薔薇色の頬と白いうなじの上で、金色の髪が揺れ、きらめいている。私はお前を愛し、そして死ぬ。おお、恋人よ！ 数々の口づけに私の魂は奪い去られた。私に命をかえしておくれ、私がいつでも死ねるように！」と歌われる。メロディは、リディア旋法（教会旋法の一つで＜faの旋法＞とも呼ばれる）で書かれており、独特の静謐さと格調の高さをそなえている。

ショーソン：蜂すずめ
E.ショーソン（1855-1899）

この曲もまたルコント・ド・リールの詩による、官能的ともいえる愛の歌。フランス・ロマン派の精華と呼ばれるエルネスト・ショーソンならではの、高雅な抒情をたたえる一曲である。「緑色の蜂すずめは丘の王者。彼は隣の泉へと飛んでいく、その濡れたきらめきが心に染みる、あの泉のほとりへ。金色の花に舞い下りて、彼は憩い、そのばら色の杯から愛の蜜を飲みほす、息絶えてしまうまで。おお、私の愛しい恋人よ、お前の清らかな唇の上で、あの最初の口づけで、私の魂もまた息絶えることを望んだのだった」と歌う。

マイヤベーア：歌劇「ディノラー」より “影の歌”
G.マイヤベーア（1791-1864）

マイヤベーアは、イタリアで成功を収めたのちパリに移り、多くのフランス・オペラを発表して名声を博した。1859年に初演された田園怪奇劇＜ディノラー＞の中のこのアリアは、コロラトゥーラの技巧をふんだんに盛り込んだ名曲として知られている。村娘ディノラーは、宝探しに行った恋人が行方不明になって、傷心のあまり発狂してしまう。月光の降り注ぐ夜の森で、彼女は自分の影に語りかける「私のあとをついてくる軽やかな影、逃げないでね！ だめ、だめ！ ああ、もっとここにいて私の歌に合わせて踊ってね！」。そして中間部では一転して「あの人が私を愛していることを知ってる？それでも行ってしまうの？ 夜が私を取り囲む。悲しいことに私はひとり！」と錯乱し、絶望感を募らせる。